

狩猟具としての弩弓

— 雲南怒族の弩弓製作とその射技 —

野 林 厚 志

はじめに

弩弓（弩）は東アジアからヨーロッパにかけて広く分布している武器である。ヨーロッパにおける弩弓の利用は、大石や槍などを飛ばす弩砲よりも後に成立したものであり、手携の弩弓の使用は10～12世紀ごろからと考えられている。百年戦争におけるクレーシーの戦い（1346年）で弩弓を使用したフランス軍が良く訓練されたイングランドの長弓隊に完敗したのは有名な史実となっている。一方、東アジアでは中国古代における弩弓の使用がよく知られている。青銅器製の機がすでに戦国時代の墳墓から出土しており、当時相当の威力をもった弩弓が使用されていたことを示す証拠となっている。また、始皇帝陵の兵馬俑には弩弓を専門に扱ったと考えられる弩兵が見られることから、当時の戦争において弩弓が組織的に使用されていたことが理解できるだろう。中国において武器として発達した弩弓は、いわゆる漢民族によって発明されたものではなく、その発生地は中国南方の非漢族地域であることが史記や後漢書の記述などから通説となっている。また、藤田は東西交渉史を考えるうえで、インドからの弩弓の伝播を視野にいれた記述を行なっている（藤田1974）一方、現在でも中国西南部から東南アジア大陸部では山岳地域に居住する人たちが弩弓を戦闘に使用する武器としてではなく狩猟具として使用している。

本稿では、中国雲南省の怒族が使用する弩弓に関する民族誌データをもとに、狩猟具として発達した弩弓の性質について考察を加えることにする。

1 民族誌研究の意義

武器という言葉の定義はそれが用いられる脈絡によって若干の幅がある。一般に、武器とは人間あるいは動物を殺傷するための道具である。民族誌における武器を考える場合に注意しなければならないのは、武器には物理的に相手に作用するものだけでなく、精神的、観念的に相手に作用する道具も含まれていることである。黒呪術師もしくは邪術師の用いる道具は呪術に使用されるという点においては呪具であるが、相手を傷つけたり、殺したりする目

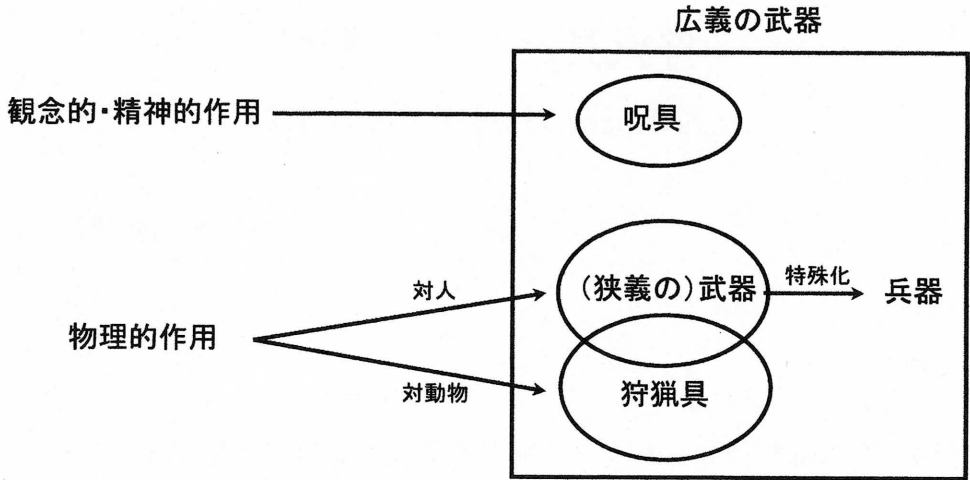


図 1

的に使われるという点では広義の武器に含まれるであろう。また、攻撃をする相手は人間や動物だけでなく、神霊などの超自然的存在であることもある。例えば台湾のヤミはアニトとよばれる霊的存在に抗するために、自分の住む集落から出かける際には刃渡りが20cmほどの短剣を携帯する習慣を有する。この短剣はあくまでアニトに対する護身用の武器であり、人間や動物を相手に使用されることはない。このように物理的に作用はしないが、一般にいわれるところの武器と同じ形態をもつ道具は各地でみられる。一方で、狩猟民や農耕民にかぎらず、狩猟活動に使用される道具はその機能に依拠し狩猟具と呼ばれる。民族誌中にみられる狩猟具のなかで、人間側から動物にたいして能動的かつ直接的に作用し、相手に物理的損害を与えるものとして、石もしくは石器、刀剣類、棍棒、槍、弓矢、弩弓、吹き矢、ブーメラン、ボーラなどをあげることができる。こうした狩猟具は武器の範疇に含まれるといてよい。網や罟は武器ではないように思われがちである。しかしながら、罟猟にはしばしば用いられる弩弓は武器としての機能を果たすものでもあるし、人間に対して用いられる一種の罟である地雷は明らかに近代兵器としての武器の位置づけが適当であろう。このようにして考えていくと、武器はそれらの作用の様式、作用する対象によって図1のように分類することが可能となる。もちろん、狩猟具と狭義の武器とでは機能や形態の面で、重なり合う部分は大きい。

実射が可能な弩弓は、図1における狭義の武器もしくは狩猟具に含まれることになる。この場合、弩弓を使用する対象が人もしくは動物かという点で、弩弓の形態や機能に差異が生じる可能性は大きい。すなわち、狩猟具として用いられる弩弓と狭義の武器として用いられる弩弓との間における形態と機能の差である。実際に中国古代において兵器として使用されていた弩弓を復元したものと、現在、中国西南部や東南アジア大陸部で狩猟用に使用されている弩弓とでは形態が大きく異なっている。当然のことながら、それらの性能にも差異が生

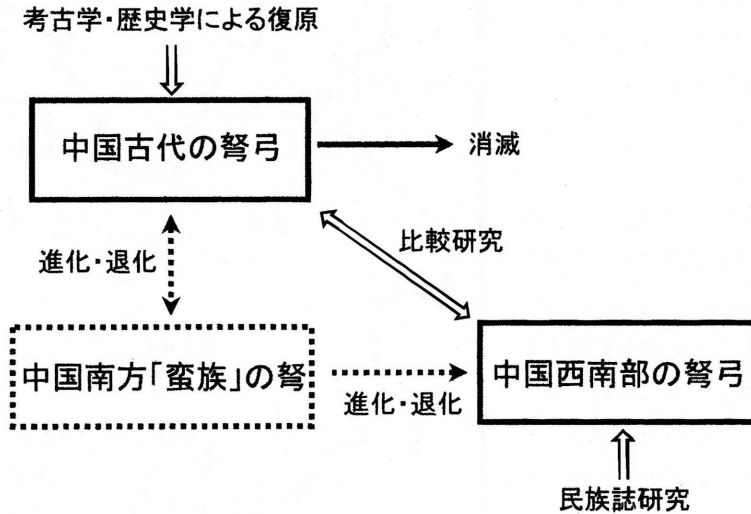


図 2

じることになる。

中国古代に兵器として発達した弩弓の起源を中国南方の非漢族がかつて使用していた弩弓に求めるためには、両者の形態や機能の差異について比較しその進化や退化について考察することが最も直接的なアプローチになると考えられる。中国古代の弩弓の形態、機能、性質等については、出土した遺物や歴史史料から実際に製品を復原することが可能であり、それを用いた実験的研究が可能となる。一方で、中国古代の弩弓の起源とされる中国西南部の当時の弩弓がこうしたプロセスをへて復原されることは容易ではない。歴史史料に散見する記述だけでは実際に用いられた弩弓を復原するには十分ではない。また、中国古代に相当する時代の「蛮族」が使用したとされる弩弓が遺跡から出土された例は管見のかぎり報告されていない。こうした場合、現在実際に使用されている弩弓の製作過程、形態、使用形態などに関する民族誌データは、弩弓の進化や退化のプロセスをさぐるうえで有益な情報を与えると考えられる(図2)。

2 弩弓の民族誌

1) 調査地と調査対象の概略

調査を行ったのは雲南省怒江リス族自治州福貢県のZ村である(図3)。Z村を含めた傈僳族自治州一帯は、年平均気温20.2℃年、平均降水量1185mmで、亜熱帯山地季節風気候帯に属している。調査を行ったZ村は、怒江に沿った幹線道路から徒歩で2時間ほどの東側の

山脈の山間に立地している。標高1800mほどの急な傾斜地に怒族の慣習家屋が点在する3個の自然村からZ村は構成されており、人口はおよそ500人である。Z村の住人の大半は怒(Nu)族とよばれるエスニック・グループである。傈僳族自治州内における怒族の人口は25,789人(1995年末)で、主として雲南省北西部を貫流する怒江(サルウィン川)の兩岸の山岳地帯に居住している。言語はチベット・ビルマ語系で、怒語とよばれる固有の言語を使用しているが、方言差は大きい。またリス語

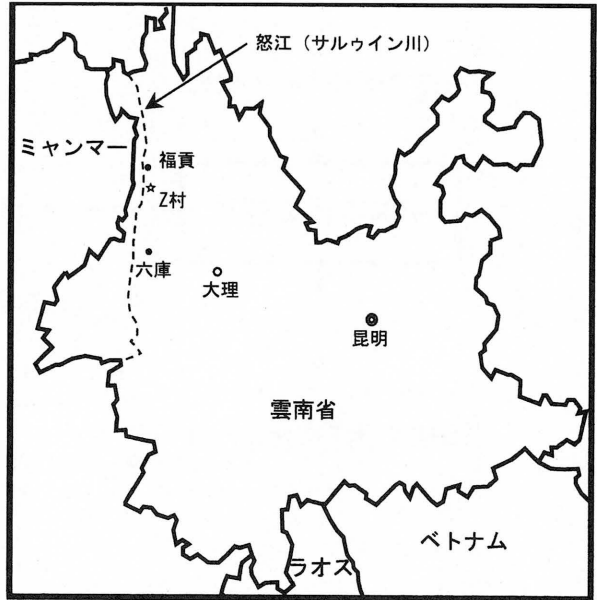


図 3

を解する怒族も多い。Z村における主要な生業は農耕活動であり、主食となるトウモロコシ、ソバ、アワ等の焼畑を集落の周囲や山間部の出作りで栽培していた。またブタ、ニワトリを食用として飼育しているほか、役畜としての牛の利用が見られた。農耕活動にくらべて経済活動にしめる役割は低いが、狩猟活動も行なっている。狩猟方法は弩弓や銃器(空気銃)を用いる猟の他、罝猟を行っている。狩猟対象は、鳥類、野鼠、リスといった小動物が主体である。ただし、設置式の大型の弩弓やとらばさみを用いた罝猟では、イノシシやクマといった中型動物が対象とされる。

2) 怒族の弩弓

a) 形態

怒族が使用する弩弓は、単弓を水平にした状態で柄となる弩床に貫通させた形式のものである(図4)。弩床には上部に矢溝がつくられ、その後方には牛の骨で作られた発射装置が装着されている。矢は矢溝におかれ、発射装置からはずされた弦によって押し出されて矢が射出される。古代中国の弩弓の機と比較した場合、中国古代のものはいくつかの部品を組み合わせて、引き金に直接弦をかけるのに対し、怒族の弩弓では、臂部を切込んで作った溝に弦をかけ、それを引き金で押し出すようにして発射するという違いが見られる(図5)。

弩弓のサイズは個人によって多少の差異が観察された。図6は実際に使用されていた弩弓の弓部(片側)と弩床との長さの組み合わせをグラフに表したものである。片側の弓部の長さが40~50cm、臂部が80cm前後の組み合わせのものが多く使用されていた。弓部は中央部が5cmでゆはずの部分が2cm前後である。弩床は特徴的な形をしており、先頭部から弓部

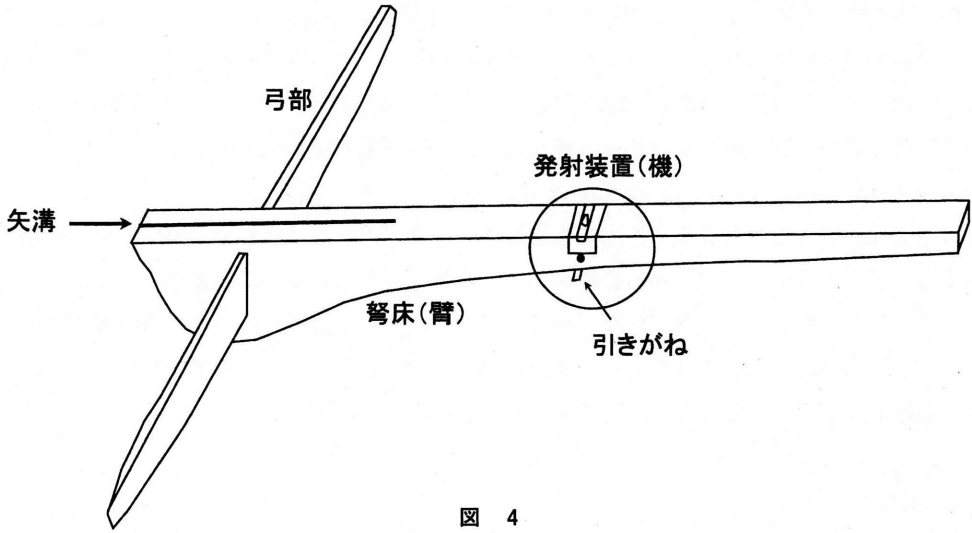


図 4

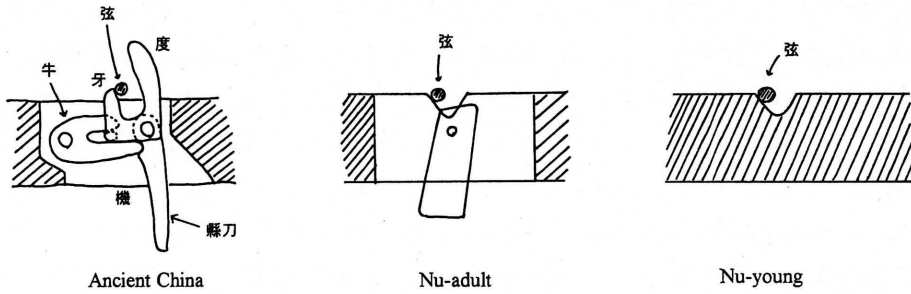


図 5

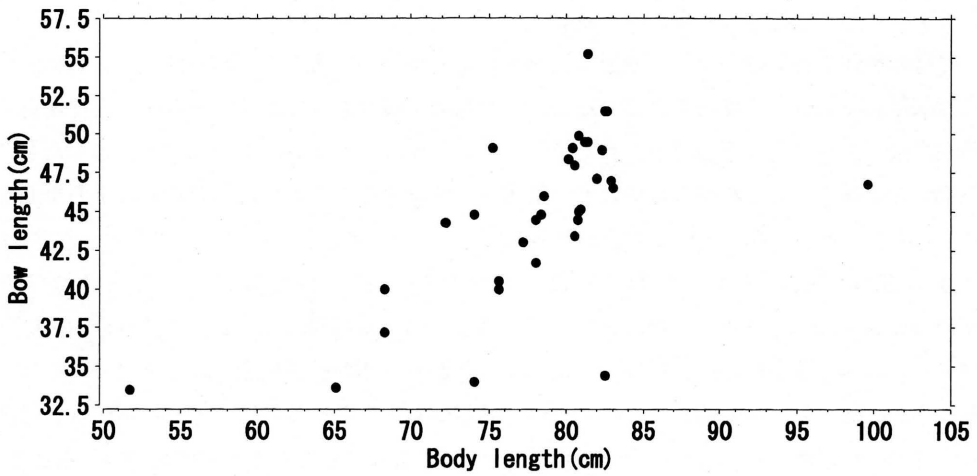


図 6

が装着されている部分にそってゆるやかに湾曲し、弓部の装着部分において最大高をとったあと発射装置の場所に向かって湾曲しそのまま直線状に、尾部まで連続するという形態をとっていた。先頭部は5, 6 cm, 弓部装着部における最大厚は6~7 cm, 尾部は3 cm前後である。弓部の中央部の幅にしたがって最大厚が決定し、先頭部と尾部の高さは見た目のバランスがきれいに見えるように決められていた。

弩床上面につくられる矢溝は弩床の先端からはじまり、終点は通常の弦の位置から製作者の手を広げたときの小指の先から親指の先までの長さがとられていた。また、さらに同じ長さの後方に発射装置が作られていた。一方で、これらの長さは弓部の長さやその弾性の度合いによっても容易に変更されており、長い弓部が使用される場合は、先端から矢溝の終点までの距離および発射装置までの距離はより長くとられるということであった。

b) 製作

素材：弩弓は基本的に木材を用いて製作されていた。罨に用いる仕掛け弓には竹を用いた合弓が弓部に使用されていた。弩弓製作は男性の仕事であり、特に成人男性の基本的な能力と見なされていた。一方で、村の中には弩弓製作に長じているとみなされている男性が存在し、その人間に弩弓の製作を依頼する例も少なくなかった。他人に弩弓の製作を依頼した場合は、労働力の提供、食器やその他道具などが代価として支払われるということであった。ただし、弩弓製作職人が生じるような専門化は見られなかった。弩弓を製作する時期については特に決まっておらず、自分もしくは他人の要請に応じて製作されていた。弩弓製作が禁忌となる時期も特に定められていなかった。弩弓製作の時期が特に決められていない一方で、素材となる木材は10~11月に切り出されていた。この理由は、この時期には木材が比較的乾燥しているため、製作後にサイズに差が生じにくいということ、また、木材につく害虫が少なく、良質の材料を得ることができるためである。切り出された木材は完成品に近い形に荒削りをした状態で保管されていた。

弓部の製作：各部位のなかで最初に製作されるのが弓部である。弓部にはカシ材（コナラ属 (*Quercus sp.*)）が使用されていた。あらかじめ荒削りをしておいた材料が、上下左右の形が対象になるように小刀で削られた後に、小刀の先にトウモロコシの芯を差し込んだものを用いて、両手で引きながら全体の形を整える。ゆはずをふくめた細部の調整は小刀を通常の使い方をしながら削っていく方法がとられた。

弦の製作：弦の製作は整形された弓部を用いて行なわれる。弦の材料にはアサ (*Cannakis sativa*) が用いられた。すでに紡績した糸から弓部の4~6倍の長さの糸を切り出す。その一端を柱にむすびつけ、強くひきながら弓部の長さ程度に折り重ねる。それらをよりあわせたものの両端にゆはずにかけられる輪がつくられる。最初に一方の輪を作って弓部のゆはずにかけたあと、もう一方のゆはずに合わせるようにしてもう一方の輪がつくられる。したがって弦の長さはかけたときに弓部が湾曲しない程度の長さをとることになる。この後、

弦には念入りに蜂蜜が摺り込まれた。これには、弦を構成する糸同士が分離しないことと、表面のけばだちを防ぐという目的があった。

弓部の調整：弦が完成した後に行なわれたのが弓部の微調整である。自然木を利用しているために、弓部は完全には対照的な形をしていない。長弓の場合は下側の弓のかえりを強くしておかなければならないが、弩弓の場合は左右のかえりが同じ程度にしておかなければ矢は真っ直ぐに飛ばなくなる。弓の強さを左右同じにするための方法として、左右の湾曲を対称にする調整が施された。弓部は弩床と非常に似た形で一回り大きな木型にはめこまれた。ちょうど弩床において弓部を貫通させる部分の上面に、幅4、5cmほどのきりこみが入っており、その部分に弓部を装着させるようになっている。その後方には弦をかけるための小さな切込みが2ヶ所作られている。用いる弓部が大きな場合は後方の切込みに弦をかけながら弓部の調整が行なわれるということであった。

木型に弓部が装着され弦を張った状態で、左右の湾曲の度合いを注意深く観察し、左右が不均一な湾曲をしている部分の射手側には木炭がのせられた。曲げを強めたい部分にだけ木炭をのせるのではなく、その周囲にも少量の木炭をのせながら、曲げの量に応じて木炭量が調整された。

弩床（臂）の製作：弩床の製作には一般にクワ科の木材が用いられる。加工の前日から水につけておき、削ったときに木材が裂けたりするのを防ぐ工夫が施されていた。弩床で最初に作られるのが、弓部を装着させる穴である。弓部の中央部と同じ幅の長方形の穴を先端から10cmほどの部分に穿ち、弓部をさしこみながら徐々に穴を広げていく方法がとられた。弩床と弓とは最終的には抜けないように固定される。そのために弓と穴の間に布と木製の楔を挟み込むことによって、ぐらつきをふせぐ方法がとられていた。弩床の各部分はなたで削りながら整形された。各部分を決定する規準になるような長さは特に決められておらず、製作者が適当だと考える形とサイズに仕上げられていった。

発射装置の製作：中国語で機とよばれる発射装置の部分は牛の中手足骨を材料にして製作されていた。発射装置は基本的に台、引き金、引き金を固定する固定軸で構成される。骨を用いるのは台と引き金の部分であり、固定軸には竹が使用されている。

最初に発射装置をつくる位置を定め、精確に小刀で穴を穿つ作業が行なわれる。つぎに、骨の緻密質の一部を発射装置の穴のサイズに合わせて加工し装着する。その後、引き金があるように台の垂直方向に長方形の穴をあけ、側面には固定軸を通す穴があげられる。

矢の製作：発射装置の完成をもって弩弓の基本的な製作は終了する。この後、手持ちの矢を用いて試射が行われ、矢道にぶれがないかどうかなどの確認が行われる。特に調整が必要なければ、細かな毛のついた葉で全体をみがきあげ表面が滑らかにされた。また、弩床の側面先端には親指のさきほどの粘着物がつけられた。これはハリナシバチの巣壁からできた接着性の物質である。弩弓を下方に向かって射る際に矢のうしろにつけておくものであり、矢が弩弓から滑り落ちないようにするために用いられる。

矢の持ち合わせが少ない場合には矢の製作が弩弓の製作にあわせて行なわれる。矢は15～20cmの竹筒を幅5mm程度に裂いたものに、竹の皮で作った羽根をとりつけたものである。矢は炉で矢に熱を加えながら直線状になるようにしあげられる。矢の先端の形状には2種類あり、一つは鋭く尖らせたタイプであり、もう一つは尖らせず、鈍い先端をもつタイプである。これらは毒を使用するか否かで使い分けが行なわれていた。鋭く尖らせた方は毒矢用で中大型動物の狩猟に使用し、とがらせないものは通常の狩猟に用いられ、毒は塗布されないものであった。

3) 射技

a) 目的と方法

弩弓の性能を知るための一つの方法として、復原された弩弓もしくは実際に使用されている弩弓の飛距離、的中率、強度などを測定することがあげられる。こうしたデータは実験室的な条件のもとで収集することによって、弩弓にかぎらず、道具の一般的な性質をあらゆるデータとしてきわめて重要な意味をもつ。一方で、個々人のもつ技巧が道具の性能を左右することも十分考えられる。熟練した射手の場合と未熟な射手では弩弓の的中率に差が生じる。また、的中率と距離との関係は、弩弓が対象となる動物や人間とどれぐらいの距離で用いられることが可能であるかということについて具体的なデータを提供することができる。こうしたデータは実験的研究によって得られるデータから構築された一般的なモデルを具体的に検証し修正するうえで不可欠なものと考えられる。そこで怒族の人たちに弩弓を実射してもらい、その的中率の個人差や有効射程距離についてのデータを収集した。

行射は、10、20、30mと距離を3段階にわけ、同一距離で射る本数は6本とした。標的はアーチェリー競技の室内18m用の的（直径20cm）を用い、的内の中の射中した場合は、その点数に関わらず的中とみなした。的中した矢については的中孔にしるしをつけ、後に的中したものと判別ができるようにした。30mの行射に際しては矢の跳ねかえりが生じたが、新たな的中孔が確認できるものは的中として扱い、的中孔が確認できないものは的中とはみなさないことにした。

b) 結果

表1は38人の行射成績を距離ごとに示したものである。これらの結果について統計的処理を行なったところ、10mと20mおよび20mと30mではそれぞれに的中率に有意差が認められた（Wilcoxonの符号付順位検定、 $N=36$ 、 $Z(10m*20m) = -4.605$ 、 $Z(20m*30m) = -2.607$ ）。

個々の的中数の変化は次のような4つのパターンに分類された。

- ①10mから20mへの的中数が2以上減少し、20mから30mへの的中数の変化は ± 1 の範囲である

②10mから20mへの的中数の変化は±1の範囲であり、20mから30mへの的中数が2以上減少する

③10mから20mへの的中数の変化、20mから30mへの的中数の変化ともに±1の範囲である。

④10mから20mへの的中数が2以上減少し、20mから30mへの的中数が2以上増加する

それぞれのパターンに含まれる人数は①18人、②5人、③12人、④1人であった。また、弦切れがのべ17本発生した。2名については弦切れのために20、30mの行射が途中で不可能となったために、これらの結果からは除いている。

行射はおおむね次のような手順で行なわれていた。まず腹部に弩床の尾部をあてて両手で弦を引き、発射装置上の溝に弦をはめ込む。次に矢の先端を弩床の先端にあわせながら矢溝にのせる。数秒間狙ってから引き金を引き、矢が発射される。

行射姿勢は大きく立位と座位にわかれ、座位はさらに方膝をたてて方膝を着地させる姿勢と両膝ともに着地させる姿勢とにわけることができた。立位の場合、的にたいして正面を向く立ち姿勢と斜めに向く立ち姿勢があり、座位の場合は方膝立ち、両膝立ちともに正面を向いた姿勢がとられていた。数名を除き利き目は右目であり、左手で弩床をささえて右手で引き金をひく方法がとられていた。

4) 弩弓を用いた活動

現在の怒族の人々は弩弓を狩猟具として使用しており、それを対人目的に使用する

表 1

射手No.	距離			得点パターン
	10m	20m	30m	
1	6	1	1	①
2	3	0	0	①
3	3	3	2	③
4	3	3	0	②
5	4	2	3	①
6	4	1	1	①
7	3	4	0	②
8	4	3	1	②
9	2	0	0	①
10	2	3	2	③
11	5	0	0	①
12	3	0	0	①
13	1	0	0	③
14	3	0	0	①
15	4	3	0	②
16	1	1	1	③
17	2	1	1	③
18	3	0	1	①
19	4	0	0	①
20	2	1	0	③
21	5	1	0	①
22	3	1	2	①
23	5	4	0	②
24	2	1	0	③
25	3	0	2	④
26	3	1	0	①
27	3	-	-	*
28	3	-	-	*
29	3	1	0	①
30	3	2	2	③
31	2	1	1	③
32	3	1	0	①
33	3	0	0	①
34	1	1	0	③
35	0	0	0	③
36	2	1	0	③
37	6	2	1	①
38	2	0	0	①

*弦切れによって使用できる弦がなくなり、行射が不可能となった。

ことはない。怒族の人たちは弩弓を通常は樹上の鳥やリスといった小動物の狩猟に用いる。一般に怒族の人々が用いる弩弓は単弓である。単弓は合弓に比べ、強い張力は期待できない。このため、飛距離は合弓にくらべて短いだけでなく、金属製の鎌を用いた矢の使用にも適しているとはいえない。逆に、弩弓は身近にある材料をもとに短期間で製作することが可能である。破損した場合も、乾燥状態や素材の質を選ばなければ、材料の調達は常に可能であり、新しい弩弓の補充は比較的容易に行なうことができる。すなわち、日常的な狩猟活動に特化した道具として弩弓が製作、使用されてきたと考えてよい。ただし、先述したように、怒族にとって狩猟活動が生業活動にしめる役割はそれほど大きくない。基本的に動物性の食料としては家畜である豚や家禽の鶏を利用している。狩猟活動はあくまで補助的な生業活動であり、狩猟に専念する明確な猟期も存在しない。狩猟活動は農地への行き帰りや、農作業の間などに行なわれ、狩猟活動のためだけに時間を割くことはほとんどない。実際に弩弓を用いて狩猟活動を行なっている男性にその目的について質問したところ、38人中28人(74%)がその第一の理由として畑を獣害から守るためであると答えていた。すなわち、怒族の人々にとって狩猟は農耕と密接に関わっている活動となっている。一方で、彼らは熊やイノシシといった中型動物の狩猟も行っている。こうした中型動物の狩猟には、通常用いる弩弓では力不足であり、竹を用いた合弓を製作し仕掛け弓の形式で用いることが多い。しかしながら、こうした狩猟活動も日常的に誰もが行なう類のものではなく、かなり狩猟活動に熱心な一部の間人によって行なわれるものであり、その目的の一つにはやはり獣害防止があげられている。

このように日常的に使用される弩弓は、すぐに持ち出せるように家屋の壁にかけておくのが普通である。特別な保管場所におかれることもない。弩弓がもつ社会的な側面としてあげられることは、日常的な道具にもかかわらず、弩弓は男性のみが製作し、男性のみが使用できる道具であるということである。女性が弩弓や弩弓製作に用いる道具にふれることは禁忌とされていた。これをやぶると獲物が取れなくなると考えられていた。唯一、女性が弩弓に関連した道具にふれることができるのは、新年における「弓くらべ」の時である。彼らは中国の新年にあたる春節に弩弓を用いた競技を行う。これは、女性がトウモロコシの粉で作った餅を標的にして、男性が弩弓を用いてこれを射抜くというものである。男性がこの餅を射抜けばその餅を男性が獲得することができる。逆に射ち損じた場合には、射ち損じた矢によって狙われた餅を作った女性がその矢を獲得し、自分の夫や父親、兄弟などにあげることが可能となる。この「弓くらべ」には求愛の意味合いは含まれていないということであった。男性は餅を得るために仕上がりのよい矢を使用するため、女性がこの矢を獲得し親しい男性に渡すことは非常に喜ばれるということであった。この時のみ女性が矢にふれることが可能とされていたが、弩弓本体にはいかなる場合でもふれることは禁忌とされていた。

女性がふれてはいけないというものの他に確認できた弩弓に関わる禁忌は、食に関する忌避であった。狩猟に弩弓を使用する者は、動物の尾を食することは禁じられていた。矢が尾

のように曲がって飛ぶために、獲物に当たらなくなるからという理由であった。

女性の接触に関する禁忌を除けば、弩弓そのものについては象徴的もしくは宗教的意味づけは特に与えられてはいなかった。一方で、弩弓の射手について彼らは特別な意識を持っていた。それは、社会の中での射手の位置づけが弩弓の的中率に反映すると考えられていることであった。例えば、筆者が弩弓製作を依頼した男性はZ村の教会の管理者を務めており、村の中では一目おかれる存在であった。これは村長などのように行政側からの任命によって選ばれる類のものではなく、村の人たちの推薦によって選ばれていた。こうした人間には徳のようなものが備わっており、弩弓もよく的中させることができるというのが彼らの考えであった。しかしながら、彼の行射成績は特に傑出していなかった(No.4)。一方で、弩弓の行射技巧に長けている人間が、村の中で名声を勝ちえるということもなかった。

3 考 察

一般的な戦闘行動の展開は、①AからBへの攻撃、②Bの防御ならびに反撃、③Aの防御ならびに再攻撃といった過程が繰り返されることになる。Aを主体に考えた場合、Aが戦闘に勝利するためには、①と③をより効果的に実施し、②を極力排除する必要がある。怒族の弩弓がこの①から③に用いられた場合、次のようなことを想定することができる。①においては、まず的中率という機能的側面が重要となる。怒族の使用している弩弓の有効射程距離はそれほど長くない。この場合の有効射程距離というのは、的中率がある程度確保できる距離のことを意味する。例えば、実際に弩弓を製作した際の試射において、製作者は的と行射位置との距離を約18mとっていた。製作者は距離計のようなものは所有しておらず、目算での距離を設定していた。弩弓の試射は通常この距離で行なわれる。製作者はこの距離である程度の中すれば、その弩弓は合格であると考えていた。また、春節におこなわれる「弓くらべ」においても正式に定められた距離はなく、15~20mほどの距離を設定して行われるということであった。すなわち、怒族の人たち自身も、弩弓の有効射程距離は20m程度であることを自覚していたことになる。この距離は②③の過程に展開していくうえで重要な意味をもつ。なぜならば、Aが③の過程に進めるまでの時間、すなわち弩弓の行射間隔に対して、20mという距離はかなり短いからである。弩弓の行射間隔には多少の時間を要する。単弓ではあるものの檜材を使用した弓部の引きはかなり強い。弦を引ききり、矢をつがえ、狙いこむ時間に少なくとも数秒を要する。さらに、行射実験でもわかるように、麻でできた弦は弦切れをよく起こす。①が不十分に行なわれた場合の弦切れはAにとっては致命的となるだろう。また、仮に①が十分に行なわれたとしても、手負いの相手に攻撃される可能性は十分ある。一方で、野鳥や野鼠といった小動物を対象とした狩猟活動において弩弓を使用すれば、射手は10m~20mの距離から獲物を狙うことが可能となる。これは獲物が人間に気づかない

もしくは、警戒しない距離としては十分である。例え失敗しても、射手に危険がおよぶ恐れもない。こうした点を考えた場合、怒族の弩弓は彼らが行なう狩猟活動、すなわち農耕活動に付随した形での小動物の狩猟には非常にすぐれた道具である反面、戦闘用の武器としては不都合な面が多いということがいえるであろう。

戦闘用の武器として発達した中国古代の弩弓の起源を考えるうえでこの点は非常に重要となる。すなわち、狩猟具として使用されていた弩弓が兵器としての弩弓に進化しうるものなのかどうかという問題である。藤田は、史記における中国南方「蛮族」の弩弓の射法と、アレキサンダー大王伝にみられるインドの弩弓の射法との類似した点を指摘しながら、中国古代の弩弓と西南中国からインドにかけて広く分布した弩弓との関連性について言及している(藤田1974)。両者に共通しているのはいずれも弩弓がきわめて強い力をもっており、足で弓部をおさえながら弦をひかなければならないという点である。特にインドの弩弓は歩兵の身長ほどの大きさであり、地面に設置して使用したと伝えられている。藤田はこうした弩弓がインドから南方「蛮族」に弩弓が伝わったのちに、中国へは韓を通して弩弓は広がりを見せたと考えている。ここで、注意すべきことは、伝播したと考えられる弩弓はいずれも戦闘用に適応した弩弓であり、現在の怒族が使用しているような携帯性にすぐれてはいるものの、威力はあまり強くない、もっぱら小動物の狩猟に用いられる弩弓は想定されていないことである。そういった意味では、彼らがしばしば地面に設置して使用する強力な掛け弓については、その性能が対人用に戦闘行為において使用される条件にあうものかどうかについては今後検討する必要があると考えられる。

まとめ

相手を殺傷するという同じ目的をもつ道具でも、対人と対動物では、威力およびそれに応じた素材の選定、使用法の違い(携帯性、使用の持続性など)、使用者の違いによってその形態が異なる可能性がある。怒族の人たちが日常的に用いている弩弓はその威力は小さく、中大型動物への殺傷能力が高いとはいえない。怒族にとって弩弓は鳥やリスといった小動物を対象とした補助的な狩猟活動の道具として適応してきたものであり、有効射程(的中)距離が短い点や、弦切れのために持続的な使用が中断されることが多い点など、戦闘用の武器としては必ずしも適当ではない属性をもつものである。また、周年の経済活動において、怒族が生計を維持するために狩猟活動は必ずしも不可欠なものではない。彼らの狩猟活動は農耕活動の合間に行ない、畑の獣害を防止することが第一の目的であり、その目的を果たすために携帯性にすぐれ、製作が簡便であることが怒族の弩弓の大きな特徴となっている。

怒族が弩弓やそれにかわる狩猟具、狩猟技術をもつ他民族との文化接触をどのように持ちつづけてきたかについては多くの事象から検証していくべきことであるが、少なくとも彼ら

が弩弓は「狩猟具としての弩弓」として発達してきたと考えるべきであり、武器としての発達が著しかった中国の弩弓とはその性格をかなり異にするものと考えてよい。逆に「武器としての弩弓」が武器としては退化しながら、狩猟具へと進化したという過程も可能性としては残されるであろう。生業活動に関係した道具は、自然環境と生業形態に適応した機能を持ち、それに応じた形態が工夫されていくと考えてよい。一方で、より有効な道具は物質文化の中に容易にとりこまれていくことも多い。東南アジアも含めた周辺地域の弩弓には、怒族の弩弓とは形態や素材が異なるものもみられる。こうした事例を参照しながら、同地域における弩弓の発達について、狩猟具ないし武器としての進化と退化という観点から比較を行うことを今後の課題としたい。

(参考文献)

- 林巳奈夫1972『中国殷周時代の武器』京都：京都大学人文科学研究所。
藤田豊八1974『東西交渉史の研究－西域篇－』東京：図書刊行会。
罗钰1995『雲南物質文化：採集漁獵卷』昆明：雲南教育出版社。
怒江傈僳族自治州州委宣传部・怒江穿傈僳族自治州州委講師団編1996『怒江傈僳族自治州州情知識』北京：民族出版社。
陶天麟1996『怒族文化史』昆明：雲南民族出版社。